

1階平面図 S=1:200

地下平面図 S=1:200



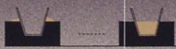
Alive ?

住まいが・・・

大地を穴を掘り、楔を打つ。
天に開いた静寂な空間をつくる。
掘られた土は、周辺に盛られる。
外に開いた動的な空間をつくる。



A-A' 断面図 (Alive?) S=1:100



Dead ?

墓になる・・・

身体を失ったら・・・
身体は、住まいに埋められる。
住まいは「墓」になる。
楔は、墓標となる。
地上は、小さな森になる。



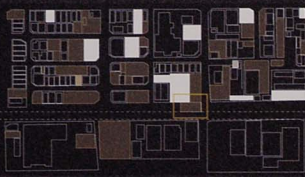
A-A' 断面図 (Dead?) S=1:100



1階平面図 S=1:200



地下平面図 S=1:200



計画敷地：兵庫県神戸市長田区

- 計画敷地
- 震災後の空地
- 震災後の駐車場
- 震災前の道路幅員

10年前の阪神淡路大震災で、最も大きな被害を受けた地区であり、立地区画整理事業の対象地である。都市構造の異なる古い建物に空地が点在している。計画敷地は、大きな幹線道路（20m）建設予定地であり、現在は、道路の真ん中にポツリと残されている。



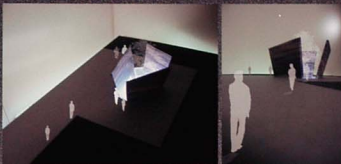
MODEL (Alive ?)



住まいの角観

隆起する外部空間

MODEL (Dead ?)



大地に突き刺さる墓標

墓と小さな森

住まいの死と生

- Dead or Alive ? -

日本の住まいから「死の空間」が消えた。

日本の住まいには、長い歴史のなかで、神棚・床の間・仏間などといった、人間の「生」を超越する「死」（神）の空間が組み込まれてきた。その空間は、住まいの奥で暗がりを持つ不気味な静けさとなって「身体」に訴えかけ、日本独特の道徳観・礼儀作法が培われてきた。

近い将来、大量の死体予備軍を抱える現在、都市空間の中で自分の死に場所を見つけることすら困難であり、新しい住まいと「死」の空間の関係が問われている。

この住まいは、人間の生と死というごく当たり前のサイクルと対峙する。大地に打込まれた「楔」によって、天に開いた静寂な空間と、隆起する動的な外部空間を持つ住まいに専ら。そして、身体が朽ち果てた後、この住まいは墓となる。その時、この楔は名もない無名の人の魂の住まいとしての墓標となり、既存の都市システムに対するアンチテーゼとして存在し続けるのである。